木のおもちゃの聖地　－ドイツ・エルツ山地　・ザイフェン

2016 年 5 月 28 日　朝日カルチャーセンター立川　　岡部由紀子

＜ドイツ・木製おもちゃの歴史＞

ニュルンベルクが推進役

交易路が交差し、中世からおもちゃの集積地、積み替え場所

15世紀、おもちゃ生産と取引の中心地

おもちゃ業者は、2種類

1. ツンフトに加入していない安価に量産する業者
2. 貴族や領主に納める贅沢なおもちゃを作る業者

交易路沿いの生産地 → ニュルンベルク → 世界市場

17世紀から、ニュルンベルクのおもちゃ商人は、各生産地から家内工業で作られた製品を買い付けるようになる。

　モットー 「もっとも安く作る所が（おもちゃの）産地となる」

エルツ山地では、ろくろ木工で日用品を生産していたが、17世紀末、おもちゃ製造が始まり、行商人が製品を売り歩いた。

１８世紀半ばからの市民階級の形成

ニュルンベルクのおもちゃ生産は全盛期を迎える。

子供の教育のためのおもちゃが登場

　積み木、錫製の人形、楽器

19世紀に入ると、生活場面を再現したミニチュア模型が流行

　ドールハウス、店、町や村の風景、ミニチュア細工の人間や動物

おもちゃの見本帳が登場

1793年、ニュルンベルクの大手取次会社が絵入りカタログを作成

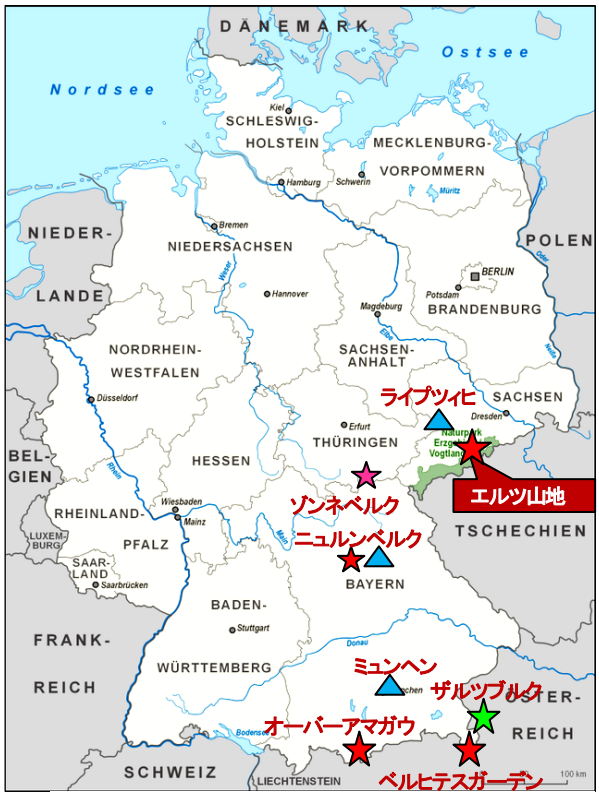
19世紀に入ると、ゾンネベルクや、エルツ山地の取次業者も見本帳を作り、木製のおもちゃの生産を牽引（問屋制家内工業）

多様な素材のおもちゃが登場

ニュルンベルクでは、19世紀中頃からブリキのおもちゃ、鉄道模型の生産へとシフト。ゾンネベルクでは、陶器で頭部ができた高級な人形が作られ、小規模な生産地では、紙粘土の製品が増える。

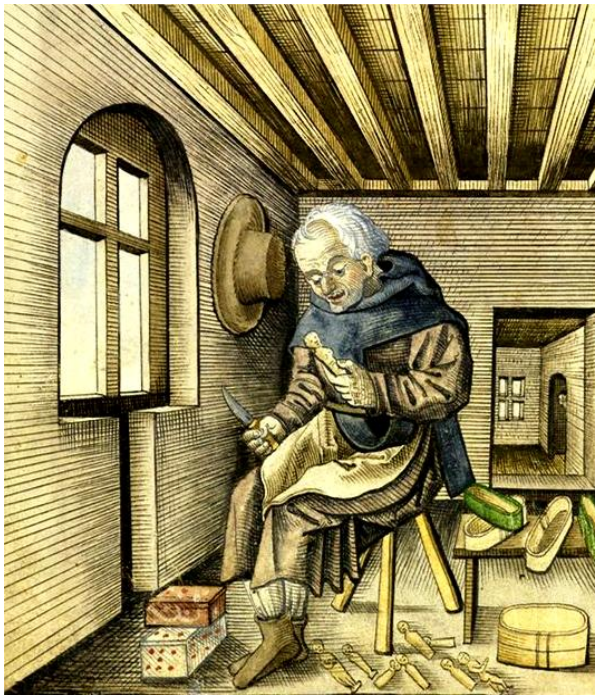
エルツ山地が木製のおもちゃ生産の中心地へ

19世紀初頭からの木材不足と、19世紀後半のヨーロッパ各国の関税の引き上げを、エルツ山地は、超ミニチュア化と伝統的な技法の堅持、クリスマス関係の製品を増やす工夫で乗り切った。



▲ 重要なおもちゃ市のたった都市

★ おもちゃ作りが行われていた主な場所



人形作りの職人 Dockenmacher　1558 年
彫刻刀で木の人形を削り出す。
右下には人形を入れると思われる箱
ニュルンベルクの「１２人兄弟の館」の記録文書より
Hausbücher der Nürnberger Zwölfbrüderstiftungen

＜ザイフェンとおもちゃ作り＞

鉱山業がきっかけ

エルツ山地西部の銀の採掘地 … 余暇に作った木彫りの彫刻が有名　　Annaberg-Buchholz, Schneeberg など

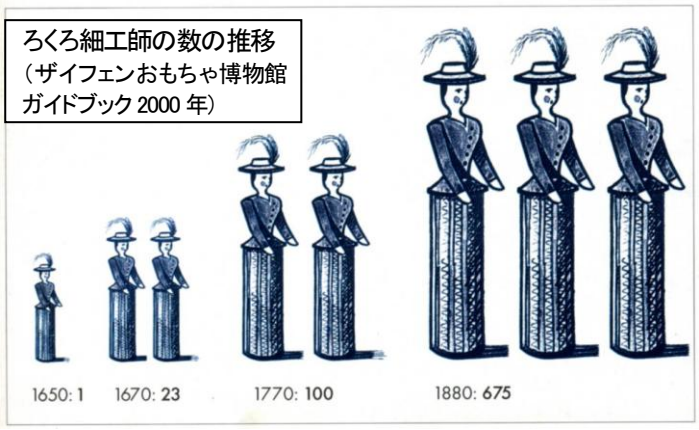
錫の採掘地ザイフェン … わずかな鉱夫としての収入 ＋ 副業が不可欠

鉱山労働者と木工細工の関係

錫洗鉱や農業ができない冬期の稼ぎ口

年を取っても、怪我をしてもできる仕事

水を制御するために必要な木材加工の技術



鉱山採掘業の停滞・衰退　→ ろくろ細工師が増加

「砕鉱機」施設

水力を利用して鉱石を砕く「砕鉱機」施設が1560年頃には

ザイフェン川沿いに8箇所あった。

鉱山業の衰退に伴い、「水力ろくろ」作業場に転用された。

「水力ろくろ」作業場

1758年にできた「水力ろくろ」作業場がある場所に、1973年、エルツ山地野外博物館が作られた。

錫鉱山が閉山となった19世紀半ば、ザイフェン川沿いには20棟の水力ろくろ作業場があった。

1912年に電気が供給されるまで、ろくろ職人が賃料を払って利用した。自宅で足踏みろくろを使う者も多かった。

ザイフェンで生まれた秘密の技法　「ライフェンドレーエン」Reifendrehen

18世紀末に考案され、1925年までは非公開だった高度なろくろ技術

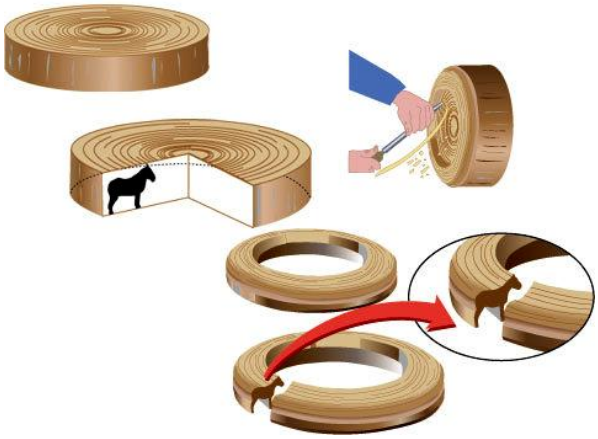
1488年にザイフェンに設立され、1830年頃まで操業していた、ガラス工房 Glashütte の技術がヒント

輪切りにした太い木材（ドイツトウヒ）をろくろに固定し、断面が動物の形になるように、ドーナッツ状の輪を削り出す。

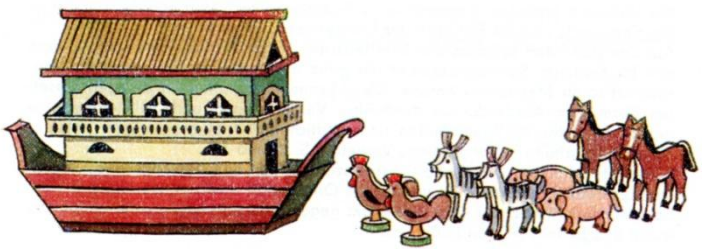
その輪を切り割り、多数の動物の原型を作り、細部を彫って形を整え、彩色する。

1850年ごろから大流行した「ノアの方舟」のミニチュア細工の動物たちを「ライフェンドレーエン」で作った。

大量に短時間で制作が可能 → 安価 → 他の産地の彫刻品との競争に勝つ → ザイフェンの名が知れわたる



Frankfurter Rundschau の記事から



「ノアの方舟」船はミニチュアの動物を収納する入れ物でもあった

ザイフェンおもちゃ博物館ガイドブック 1990 年から

ザイフェンで復活した伝統技法

シュパンバウム　Spannbaum

立木のミニチュア細工で、エルツ山地特有の伝統的な技法
1920年代、ザイフェンのおもちゃ専門学校の主導で復活
湿気を含んだボダイジュでできた円錐形の木材をろくろに固定し、木の表面を
突きノミで削って巻き毛状にする。

削り花　Blümel

20世紀初頭、ザイフェンにシュパンバウムの技術を応用してミニチュアの
花を作る技法が生まれた。
さまざまな形状の花を削りだし、薄い油性塗料で彩色する。
シュパンバウムと同様、ドールハウスやミニチュア細工を飾る用途

おもちゃの入れ物も一工夫

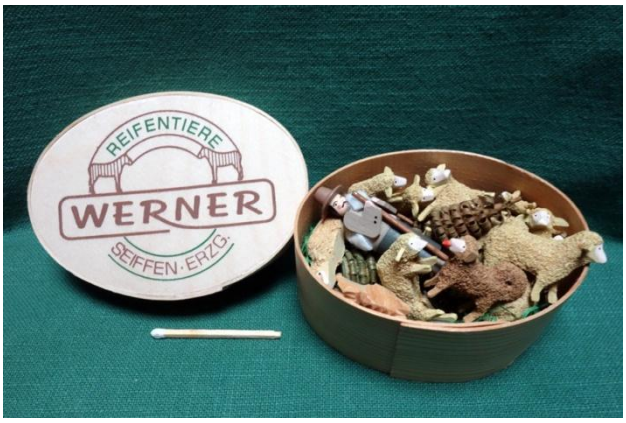
曲げ木の箱　Spanschachtel

かんなで削ったドイツトウヒ（*Picea abies*)の薄い板で作られた楕円形の箱で、
板を冷水、次に湯に浸し、柔らかくしてから型に入れて曲げて成形する。
ミニチュアおもちゃの持ち運びや保存に便利、作るのも簡単
19世紀末に安価な紙製の箱が登場して、需要が減った。
エルツ山地には、曲げ木細工師もいた。Grünhainichen　Olbernhau

マッチ箱　Zündholzschachtel

マッチを箱に収納することは、19世紀半ばにスエーデンで始まった。
1905年、ザイフェンの取次業者　H.E. Langer　が、マッチ箱入りの人形の家を考案した。
超ミニチュアの人形と家具が入った、エルツ山地の民家の居間の情景が第一作だった。
パッキングを兼ねたマッチ箱入りの超ミニチュアは、ザイフェンの特産品となった。
代表的なモチーフは100を数え、ザイフェンとその周辺には、25軒の業者
1914年には、13,000個の売り上げ、1923年には、500,000個の売り上げ

「花や」のミニチュア細工は、削り花の技法を駆使



ライフェンドレーエンで作られた羊は、曲げ木の箱に入っている

ザイフェンはどうして木のおもちゃ生産の中心地になれたか

1. 貧しかったゆえの総力戦

家族総出のおもちゃ作り

木の切れ端まで利用 … ミニチュアの人形、手作りの曲げ木の入れ物

おもちゃの競争に勝ち抜くためのたゆまぬ工夫 … ライフェンドレーエン、シュパンバウムや削り花

2. 素朴で暖かみのある造形

小規模な家族経営が大半で、それぞれが個性を競った。

3. ザイフェンのおもちゃの取次業者(Verleger)のアイデアと先見性

他のおもちゃ生産地のような大規模な取次業者はいなかった。

生産者の立場で考える地元密着型の業者がいた。 … マッチ箱に収まったドールハウス

4. おもちゃ養成学校での切磋琢磨

1853年にザクセン王国のおもちゃ専門学校 Spielzeugfachschule がザイフェンに設立された。

多くの優れた工人を養成して、現在も「おもちゃ職人養成専門学校」として存続している。

優れた指導者によって伝統技術の復活と、新しいデザインのおもちゃが生まれた。

Alwin Seifert ドレスデンの民俗芸術博物館の創立者 Oskar Seyffert の勧めで、1914年から校長をつとめた。
伝統技法の復活、クリスマスにちなんだミニチュア人形、動くおもちゃ

Max Schanz 1920年から教師、1933年から校長
おもちゃ製作を職人仕事と認定させることに尽力
多くのデザインを手がけ、1937年パリの万博で「クリスマス市のおもちゃ売りの子供」が金賞を受賞

5. 先人の技から学ぶ

古い木工芸の保存と展示を、おもちゃ学校で行った。 → エルツ山地のおもちゃ美術館の前身

技と知恵の伝承 … 生徒は、地元で作られた古いおもちゃから学ぶ機会が持てた。

講座でお見せした木工品の作者・ザイフェンの現在の工人

クリスチャン・ヴェルナー Christian Werner

「ライフェンドレーエン」の技法を用いた羊飼いと羊と番犬のセット

ギュンター・ライクセンリンク Günter Leichsenring

騎馬人形、「削り花」技法を用いた花屋のセット

旧東ドイツの輸出品だった騎馬人形

講座で用いた写真資料の実物は、次のミュージアムで見ることができます。

Erzgebirgisches Spielzeugmuseum Seiffen エルツ山地おもちゃ美術館（ザイフェン）

Erzgebirgisches Freilichtmuseum Seiffen エルツ山地野外博物館（ザイフェン）

Museum für Sächsische Volkskunst ザクセンの民俗芸術博物館（ドレスデン）